

## 北米社会学の30年

ハリー・K・西尾

ただいま、ご紹介いただきましたトロント大学のハリー・K・ニシオです。1953年に北米にまいりましてから、ちょうど30年になりました。その間、社会学の研究者としていろいろ観察し考えてみたことを、できるだけ具体的に整理し、お話ししたいと思います。すなわち、私が接したい人々の社会学の理論研究者たちの固有の特性を考えてみたり、北米の政治状態、経済問題などを考慮し、また、カナダ社会学とアメリカ社会学との区別をできるだけするよう心がけながら、過去30年間にわたる北米社会学を、と一緒に眺めていきたいと思っています。

理論と申しますと多くの学生諸君は、非常に強く恐怖心をいだくでしょう。理論はむずかしい、抽象的だ、あまりにも問題が現実社会、あるいは実際の社会現象からかけ離れているというように考えがちとなるでしょう。しかし、私たち理論の研究にあたるものは、つねにそれぞれの理論家のもつ個性を考慮に入れて分析を試みるわけです。そして、それぞれの理論家がおかれている社会的・問題的条件を、考慮していく必要があります。大胆にいうことを許されるならば、理論の研究は、学史のなかに位置し、かつ学史の枠のうちに扱われなければなりません。つまり、社会の歴史が一つの理論の形態を規定し、あるいは制限をあたえるものと、私自身は考えるわけです。勿論この考えは、あくまで私の理論的立場です。多くの他の理論家たちは、そういうことはあまり問題としないでしょう。

さて、一つの歴史にあう理論は、あまり説明の役に立たないのではないかと、理論が理論である以上は、それはあらゆる歴史状態、または文化形態にあてはまるようなもの、換言すれば普遍性をもった理論でなければならないのではないかと。一般的には、そうした議論があります。しかしながら、

私が現在考えております理論は、こうした高度の非常に抽象化された包括的な理論ではありません。むしろもう少し抽象化レベルの低い、かつ応用度の高い理論をまず考えるわけです。それは理論が価値から全く遊離しなければならない、価値からの中立性を保たなければならないというものではないわけです。むしろ、新しく構築される理論は、歴史的條件に充分適合し得、意義のある解釈をなされ得るかどうかにかんがわなければならないというものです。そうした見地から私のお話を進めたいわけです。

以上の観点からしますと、ある理論形態は、ある時期には非常に流行し人気がありますが、世界状態が変わるとその人気は低調になります。つまり彗星のようなもので、ある社会理論は非常に短い間に落ち、消え去る場合があります。そういうふうに現われたり消えたり、関心をもたれる諸理論は変化しやすく、それは、いろいろな社会理論の流れのなかにみられるわけです。この30年間にわたって、私は社会学をそうした歴史的な観点からみてまいりました。それは、私自身が育った社会学界がアメリカの西海岸のそれであり、ことにいわゆる「パークレーの社会学」の見地にもとづくものです。私が参りました1950年代のはじめ頃は、そうそうたる一流の社会学者がカリフォルニア大学・パークレー校に集っていました。ベンディクス (R. Bendix)、リップセット (S.M. Lipset)、デービス (K. Davis)、ゴフマン (E. Goffman)、スメルサー (N. Smelser)、シャーマン (F. Schurmann)、ブルーマー (H. Blumer) などという著名な社会学者がそこで、さまざまな専門的分野の研究をやっていたわけです。私の北米社会学への最初のステップは、こうした貴重な機会にめぐまれました。同時に西海岸の社会学界からみたアメリカ社会学という条件が、私に提示されたわけです。

まず私は、自分の社会学に接した経験をふまえて、つぎのようにその時期を区別することにします。つまり、1950年から1965年までを一つの期間。1965年から1975年を第二の期間。1975年から現在にいたるものを第三期のものとします。そこで一番最初の1950年から65年までの第一期には、いわゆる構造・機能主義 (structural-functionalism)、構造・機能分析を中心とする社会理論が非常に支配的でオーソドックスなものとして既に存在し、かつ発展していました。また、そのオーソドックスな社会理論は、この大学において数年前、数カ月間、客員教授として滞在された故タルコット・パーソンズ (T. Parsons) の影響を無視できなかったようです。その指導による構造・機能主義社会学は、全米だけでなく、欧州でもまた日本でも大きな影響を及ぼしていたことは事実でしょう。

例えば、新明正道教授の社会学的機能主義という業績を見ると、そこで教授自身が主張され説明された機能主義というものには、パーソンズの機能主義を中心に理論の展開を試みています。また本学では、大道安次郎先生の先駆的な業績をはじめ、それをつぐ倉田和四生先生の社会システム理論、あるいは宇賀博さんらの研究もあげられるでしょう。関西では、他にも、江藤則義先生や西村勝彦さん、そして『体系・機能主義社会学』をまとめられた本学の中野秀一郎さんなど、パーソンズの社会理論に関係のある、あるいは派生的な諸論文・業績をあげればきりがありません。とにかく、パーソンズの社会理論が、いかに深く日本の社会学界のなかに紹介され議論され、そして生きてきたかということがわかります。

そうしたパーソンズ社会学には、1937年に書きました『社会的行為の構造』“*The Structure of Social Action*”という1,000頁にあまるほど大なる博士論文があります。これはハイデルベルク大学に提出された博士論文です。そこでパーソンズは社会的行為理論を展開していくわけです。勿論、パーソンズにあっても、1937年から亡くなる1979年の間に、かなりの理論的な修正が試みられてきたことは、ご存知のとおりです。

まず最初のころ、パーソンズは行為理論そのものに、非常に大きな興味をもちました。そして、

社会的行為をこまかく解明して、それにたいする一般的な理論 (General theory of Action) を提起したわけです。中期になって、これがかなり変わり、修正を見ました。社会的行為についての理論をより明確にし、ご存知のような、一般的枠組として例の A.G.I.L. というような機能分析図式を創りだし、その機能分野が、いかに関係しあい「根本的な社会機能」を存続させているかということを考えました。しかし、後期になって、前期においてすでに理論的に捨てたと考えられた「進化論的構想」を、もう一度、理論的に概念化したわけです。そこでは新しく、パーソンズ固有の新進化論を設定していくわけです。しかも、1979年に至るまでの社会理論の中心は、合理的行為を説明する必要と同時に、「非合理的行為」(non-rational action) にもふれました。そこでは、いわゆる文化的な価値行動とか、規範的に制約された行動を研究するわけです。それにパーソンズは研究の焦点を集中したといっているでしょう。

勿論、その方法は、古典的な経済学、ことに功利主義にみられる合理性を一応受け入れるとともに、それに非合理性、文化的価値を併せて摂取し、一つの新しい「折衷論」ともいうべきものを設定しました。第二には、実証主義的・科学的な諸理論を一応承認し、それからまた行為者の目的や意欲を理論のうちに入れつつ、修正を試みたわけです。またその「観念思想」(Social Idealism) をも、自分の手で新しく修正しました。そして、この三つの伝統的・社会的な考えとをあわせて自分の行為論をつくり、構造論と機能論を構築していったのです。このようにパーソンズの貢献は、非常に野心的であり大胆です。

しかし、そうした大きな貢献の反面、パーソンズ理論は歴史性を欠いた理論形態となりました。それはそれなりに「安定した社会的秩序」を説明することが可能ではあっても、急激に変動する社会状態、あるいは社会変動そのものには不適當だと、こういった批判も提起されました。また、あまりにも彼の理論が「全体包括的なもの」(all-inclusive) であるために、理論の応用度は少いのではないかと、そうした批判もおこってきたわけです。

しかしながら、パーソンズは多くの優秀な研究

者たちを養成しました。そのひとたちは、たんにパーソンズの理論の枠組のうちで研究対象を考えるだけでなく、それからさらに一步、二歩と前進したパーソンズ理論を展開していきました。

例えば、N・スメルサー (Neal Smelser) の業績には、日本語にすでに翻訳されている『集合行動の理論』(Theory of Collective Behavior) の研究をみましても、パーソンズが考慮しなかった「制度化されていない部分の人間行動」(non-institutionalized behavior) についての理論の設定を果しました。スメルサーは、このように新しい対象分野と分析視角を、パーソンズのために開拓していったといえるわけです。

それからまた、ご存じのロバート・ベラ (Robert Bellah)——最近この大学で講演をしたことを伺っていますが——は、パーソンズの弟子の一人として、宗教学の分野で機能主義の応用を試みています。ベラは、徳川時代における宗教問題を取り扱いつつ、日本の政治的合理化プロセスを基盤とする理論を設定しました。一例を上げれば、ベラは、西欧社会における近代化について、経済的な部分が果した近代化をとりあげました。それと対比し日本の近代化を分析し、ことにそれが政治的合理化をつうじて実現してきたことを指摘します。彼は、こういった歴史的な背景のもとに、パーソンズの理論的問題を提供したのであります。

だから、パーソンズ自身は、あまり自分の理論を応用して、個別な、具体的な社会問題を研究しようという努力を、積極的には行なわなかったのです。

例えば、*Essays in Sociological Theory* をよく読んでも、(そのなかには、非常に具体的な論文が入っているわけなんです)、そのそれぞれの論文には、パーソンズの構築した包括的な理論体系とは大分異った個々の具体的な理論説明があり、またそのなかには、あまりそれとは関係のないような社会学的業績もあるとみなされています。しかしながら、この1950年から1965年の間にわたりますその業績には、キングスレー・デービス (Kingsley Davis) のいう「機能主義の神秘性」(かれは、機能主義は、「社会学説のひとつではなく、社会学説そのものである」という) という

大きな自信が存在したわけです。したがって、多くの社会学研究者は、機能主義への強い傾倒と、その神秘性への一種の信仰に似た思想へと移行するわけです。こういった状態が、第二次世界大戦をおえた、かなり安定したアメリカの政治経済、科学及び技術の世界的な優位性、アメリカ経済の世界的な拡大、というような諸傾向に支持されつつ強力に発展してきたといえるでしょう。

勿論、先程申しましたように、機能主義者の大きな社会的な功績にたいして、それに対抗したいくつかの社会理論がありました。ことに、ご存知の有名なC・ライト・ミルズ (C. Wright Mills) によるパーソンズへの批判、反発、反撃には、非常に手厳しいものがありました。

ミルズは、『ホワイト・カラー』(White Collar) を執筆し、『パワー・エリート』(The Power Elite) を発表しました。そして、『ソシオロジカル・イマジネーション』(Sociological Imagination) を発表したわけです。ことに最後の書物のなかでは、パーソンズの機能・システム理論を非常に強く批判しました。そこでは、パーソンズの難解なドイツ語的英語の翻訳まで試みる程の、個人的な攻撃さえもしたわけです。ただ、そうしたなかで、ミルズがパーソンズに対し言及しようとしたことは、「歴史的な条件やその特殊性を理論のうちに提示しないならば、その理論は社会現象にたいして、なんの意義もない」という点でした。ミルズの批判は、のちの機能主義が各方面から非難される一つの口火になりました。

この時代、つまり、1950年から65年の間に、カナダの社会学はどうであったか。ふりかえってみると、カナダの社会学は、大体三つの理論の流れに影響されて、三つの違ったものとして1950年あたりまで存在していました。

第一の系統といえますのは、カナダにおけるフランス系の社会学者たち。ケベックに住むフランス系の社会学者は、欧州の社会学理論にならって具体的な個々の社会学的研究を行なう替りに、かなり大型の研究対象を求めました。例えば、政治体制、経済的な機構の分析など大きな問題を対象として、非常に抽象的な理論の構築に、自分たちの私的なエネルギーを投入していました。これが大概ざっぱにいうと、第一番目のフランス系社会学

の状態です。

しかしながら、同じケベックにおきまして、マクギル大学では、アメリカ社会学の導入が、いち早く行われました。その代表的な社会学者にはエベレット・ヒューズ (Everett Hughes) がいます。最近、高齢で亡くなったわけですが、彼は1950年初頭に『フレンチ・カナダ・イン・トランジション』(French Canada In Transition)、社会変動の途上にあるフランス系カナダ社会という本 (これは古典的な本になっておりますが) を書いて、まずシカゴ学派の社会学を、マクギル大学のなかに植えつけました。これが二つ目の社会学的な潮流であったわけです。

第三番目の潮流は、私のおりますトロント大学において興りました。トロント大学は、アメリカと非常に地理的に近いのでございます。しかしその歴史的な関係では、英国的な歴史系統に近く、アメリカよりむしろ英国系の社会学が、トロント大学のうちに入ってきました。

それは勿論、1940年初期の状態でございます。歴史を重視することは、ある意味ではトロント社会学だけでなく、カナダ社会学全般に今でも強く残っているのではないかと私は思っています。

例えば、カナダ社会学の第一人者である S.D. クラーク (S.D. Clark) もそれより2年程前に参りまして、ここでいく人かの学生とともに、セミナーをしたということを聞いております。クラークは、カナダ社会学の父として、歴史的な観点から、いろいろな社会問題、たとえば都市化、宗教運動など、多岐に及ぶ具体的な問題をとりあげ、それを歴史的な事実にもとづいて説明しています。こういった歴史科学という傾向が、トロント大学には、非常に強くその時代から残っていたのです。もちろん、こうした傾向は、ヘラルド・イネス (Harold Innis) という経済学者がクラークの先輩としておりまして、クラークを養成し、また、かの有名なマーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan) は、そのコミュニケーションの研究でもって、日本にも知られているように思います。マクルーハンおよびクラークなどのカナダ社会学者たちの最初の歴史的な研究のはじめは、ヘラルド・イネスの示唆によって成立したものであると思われる。

それが1960年のはじめには、クラーク流の、またイネス流の歴史的な社会学系統が大方なくなりまして、ジョン・ポーター (John Ponter) の書いた "Vertical Mosaic" 『たてのモザイク』という有名な作品が提起されました。カナダの社会は、C・ライト・ミルズのみたようなパワー・エリート支配の社会ではない。アメリカ社会では一つのエリートが完全に権力をにぎり、コントロールしている。ミルズは、ご存じのように、軍人と政治家、そして、実業家がアメリカの権力を握っているとみました。しかし、その考え方は、カナダには適応できないものであるとするのです。つまり、そうした三つの代表的権力にたいして、より多くの多元的なエリートがいて、それがお互いに権力をわけあい、一つの「カナダ的なモザイク型態をした構造」をつくっているとするのです。勿論、そうした多元的なモザイク型権力構造のなかであっても、経済的なエリートは、実業家で構成されています。経済的なエリートは、他を卓越した支配力を持っているとポーターは見ました。しかし、ポーターが強調しようとしたことは、カナダ社会は、非常に強力な、かつ一面的な中央集権化された権力の構造はなく、逆に非常に多くの構成要因があること。それは機械的、有機的なものでなく、モザイク的な性格をもつとした点に特徴があります。この議論は、非常に重要な問題点を示唆しています。それは、カナダ社会はアメリカ社会とちがって、社会構造がモザイク的である。それは有機的につながっていない。こうしたことから、カナダ社会学は、構造・機能主義理論によるもの考え方とは伝統的に少し異った考え方をするようになるわけです。社会的な現実から、そういう結果が現われてくるのではないかといえるわけです。私はカナダの社会理論の設定が、こうした現実を反映していると考えられるわけです。

ただ、モザイクという概念は、さきほど申しましたように、1960年に非常に発展してきた有機体論とは、相反したものです。またそうした相反したものであるということから、できるだけアメリカ社会学とは違ったカナダ社会学の学説を設定していきたいというのが、ジョン・ポーターの考え方であったのです。したがって、ポーターの考えが、非常に広く現在までも、受け入れられてい

るといえるのではないのでしょうか。

以上からすれば、ポーターの提起した「モザイクのカナダ社会の研究」は、有機体的な社会統制の問題を考えるよりもむしろ、権力問題に、社会学的な焦点をあて、関心をはらったといえます。そこに新しいカナダ社会固有の権力分析を求めたわけです。ここに、私はアメリカ社会学とカナダ社会学のちがいがあるのではないかと思います。

しかしながら、1960年頃には、ことにカナダの大学制度が、非常に拡大・発展をしました。そして、非常に多くの社会学者が、社会的に要請されました。そこで、社会学者たちは、アメリカからカナダの方に移住してきて、教鞭を取るようになりました。こうした理由のために、カナダにおいても、アメリカ流の機能主義が、どんどん入ってまいりました。例えば、パーソンズの愛弟子であったヤン・ルブサー (Jan Loubser)、ライナー・バウム (Reiner Baum) であるとか、アフラット (Affrat, A) といわれる若いパーソンズの弟子たちが、機能主義の旗をかかげて、カナダにやってきました。そして機能主義的社会学をより発展させ、普及していったわけです。他方、これと並行して、モントリオール大学——これはフランス系の大学ですが——ここでは、ギ・ロシェ (Guy Rocher) というフランス系カナダ人が〈Sociology of Talcott Parsons〉という形で社会学研究を提起しました。それは、まず最初はフランス語で出版されたのです。そして、それから英語に翻訳されて、英語圏の方に紹介されるという状態でした。このことからみましても、一番最初に申しましたカナダの伝統的な社会理論、ないし社会学の方法は、1960年になりますと、それがアメリカの機能主義的な考え方のもとに沈んでいくというような傾向が強くなってきたのです。

しかしながら、1965年になると、1964～65年に北米カリフォルニア・パークレーにおいて口火をきりました学生運動に注目する必要があるでしょう。それは自由言論運動としての学生運動という性格のものが当初あり、非常な勢いでアメリカ合衆国全土に及び、さらにカナダにも拡大しはじめました。それはまた、欧州にもおこり、同時に日本の大学にもそれが広まる、というような世界的な学生運動がもりあがり、そこでは、反体制とい

う性格も背景にあって大きく、かつ激しいものへと変化していきました。

学生運動と申しますのは、普通の社会運動と違って、学生という非常に純粋な個人の集りが、大きなエネルギーを爆発させながら、社会変革を目標としてすすめていく一面があります。それは、他の社会運動とは異って、いわゆるハムレット的な否定観、あるいは場合によっては猜疑心もあります。さらにある面では自殺的とまでいえる精神集中ができる。しかし、それが過剰になるとそうしたハムレット的な性格とは反対のものになります。つまり学生運動が、その場合には、ドンキホーテ的な直行精神にすすむということが避けられません。そこでは、非常に強い前進力、戦闘力をもっていると思います。そうした二つの、ハムレット的、またドンキホーテ的な相反する性格をそなえつつ、学生運動は現存する社会の価値体系を批判し、ルイス・ホイエル (Lewis Feuer) の申します、「絶対像のくつ返し (de-authorization)」という目的のために、大きなエネルギーの爆発を続けていったのです。ことに、その運動は、アメリカ合衆国、あるいはカナダにおいて、ベトナム戦争と時をともにしたことに注目しなければなりません。それは、ベトナムの戦争反対運動に展開し、拡大するという傾向を強めました。そうした非常に大きく揺れに揺れていく学園のなかで、社会理論や社会学の方法もまた大きく影響されざるをえなかったわけです。

社会学理論のなかで、非常に必要とされたのは、関連性のある学説をつくることでした。いわゆる“relevance”，そうした問題との関連性をもつ研究が、非常に求められていたといえるでしょう。ただ社会学者として、じっと現況を眺めているというような、かつての学者的態度が嫌われました。研究者もふくめて一つの社会運動に参加しなければならないということ。つまりパーティシペーションは、研究者たちのうちにも求められ必要だといわれるようになったわけです。それは、かつての理論的な純粋性、あるいは中立的な科学観というものよりも、一つのイデオロギーをもち、政治的な立場をあきらかにしたうえで、社会理論を構築すべきであるとしたわけです。当時、おこりつつある学生運動は、「関連性」と「参加」の必要

性を求めました。そしてさらにイデオロギーを加えて、以上の三つの点が建前として、新しい社会学理論の実現を求めていったわけです。

そのようにしますと、さきほどふれました1960年なかばまでの機能主義は、理論のなかに「社会変動」の視角を欠いていたということになります。ことに、急激に起りつつある社会変動を説明するという理論的準備が、ここで新たに提起されるわけです。安定した社会構造のもとではかなり説得力のあった機能主義も、非常に速い時間のうちに人気を落してまいりました。

その間にありまして新マルクス主義社会学が、勢力を進展させはじめました。こういう一つの権力交替のような事態が、社会学理論、社会学者たちのグループのなかにみられたわけです。この新マルクス主義社会学を、少し整理してみましょう。1965年以降に起った新マルクス主義社会学は、私の考えでは、大体二つのタイプがあります。

まず第一は、折衷論です。折衷論のなかには、さらにまったく種類の違った二つの折衷論があります。まず、第一の折衷論のタイプは、機能主義とマルクス主義的方法とを折衷させる。その試みというものは、ダレンドルフ (Ralf Dahrendorf)、コウザー (Lewis Coser)、バンデンバーグ (P. Van'den Berghe) などの社会学者の手によって、展開されてきました。勿論、そうした機能主義とマルクス主義との折衷論は、マルクス主義的方法に焦点をおくよりむしろ、私のみるところ、機能論のうちに階級闘争を考えています。「制度化された争い」とでもいってよいでしょう。そうした点に中心をおいた社会学は、その傾向が強いほど、機能主義社会学に傾いていくわけです。こうした種類の折衷論は、その後あまり成長をみませんでした。

第二の折衷論は、フロイド的な心理学の理論とマルクス主義的方法との折衷です。それは、当時よく知られたマルクーゼ (H. Marcuse) の研究があげられるでしょう。さらに、ジョン・シーリー (John Seely) であるとか、また、ロバート・ブラウナー (Robert Blauner) などの研究者たち、主として精神科学者たちによって提起されてまいりました。ことに、マルクーゼの『第一次元の間』、『エロスと文明』などといった著作。これら

はまるで聖書のように、当時の学生運動の指導者たち、あるいは一般学生の間でも読まれたものです。

しかし、そうした折衷論、フロイト学説とマルクス主義の折衷論も、ベトナム戦争が終り、学生運動が衰微するとともに、急速に衰えてしまったようです。現在例えば私が大学の講義で「マルクーゼのものを讀んだ人が何人いるか」とたずねてみますと、常に一人か二人の学生しか讀んだ経験をもちません。名前も充分知らない人さえいます。過去10年ばかりの間に、マルクーゼ社会学の研究も衰え、その理論が充分理解されるということも少なくなったようにみえます。

このように社会学の方法における折衷論には、二つのまったく独立した、かつ異った立場がございました。しかしいずれの折衷論も、非常に短い期間に影をひそめてしまったといえるでしょう。

第二の「新」マルクス主義社会学のタイプがあります。これは、マルクス経済学——といっても、またいくつかの立場に分化しますが——を、一つの社会体系としての国家の枠にはめて、その経済関係や大衆社会的状況を分析するのではなく、その研究分析の対象を広めて、「世界資本主義体系」(A World System of Capitalism) としてとらえようとするものです。これは、世界的な規模から資本主義社会の経済・社会組織をとらえ、その枠内で搾取・被搾取の関係を考えるわけです。そこでは、先進社会と発展途上社会との政治・経済的關係を解明しようと試みます。また、南北社会の關係、コスモポリタンと辺境地域との経済的・政治的な關係などに焦点をあて、分析を試みるわけです。ここにおいて、マクロ的立場からの社会生活の分析が試みられるといえましょう。

この研究分野にふくまれる、社会学理論の設定を試みた人たちには、例えばマクギル大学にいたウォーラースタイン (E. Wallerstein)、コンコルディア大学のアンドレ・フランク (Andre Frank)、また、北欧ノルウェイ大学のヨハン・ガルトング (Johan Galtung) などがあげられます。また、第三世界のなかからは、著名な理論をフランス語で現在も書き続けておりますアミンがあげられるでしょう。そうした有数かつ有力な新マルクス主義社会学者が、世界の資本主義社会を、

社会学的に追求していったわけです。

ここでは、かなり大きい社会学の歴史的な展開をみました。つまり、社会理論やその思想的背景として進歩的・希望的な視角が重視され、これまでとは異なる新たな社会学の転換期とさえみえたわけです。しかし、いわゆるラジカル・ソシオロジーの潮流、例えばフランクフルト学派、また、さきにみましたディペンダンシイ理論 (Dependency Theory) を中心にやっている人たちなどには、統一的な視角や方法がありません。むしろ、学派間の論争や不整合性が、かなり期待のあった理論的前進を現在において阻害しているのではないかと考えられます。

そういうことから申しまして、1965年以降は、北米や欧州における経済的変動、政治的体制、そしてまた戦争などの諸条件が、大衆運動、ことに学生運動によって大きく揺がされてきたわけです。そのために北米社会学が新たな理論を求められた。それが、新マルクス主義社会学の方法であったと、解釈してもよいかも知れません。ただそれが一たん平静になるようにみえても、一定の社会理論が定着するにはいたりません。つまり他方では、内部的な意見や主張の対立。イデオロギーや、それにもとづく諸社会学理論間の分裂が始まるわけです。その分裂のために、新マルクス主義社会学の学派は、進展あるいは後退という状態がみられるわけです。これが現在の状態でないかと、私は思います。

他の一つの選択の道として、新マルクス主義によらない、まったく異った社会学的方法が出現します。たとえば、「エスノメソドロジー」 (Ethnomethodology) がこれに当たります。エスノメソドロジーによって、今までの社会学者が取り扱えなかったような人間の主体的な行動を、できるだけ詳細に考察することによって実証しているとする試みです。そうした非常にセクト的な一群が、アメリカ合衆国の西海岸におこり、それが東海岸に移り、カナダに入ってきたわけです。

今日におきましても、ガーフィンケル (H. Garfinkel) のもとで、かなり多くの学生たちが、社会学研究を進展させております。そこでは、ガーフィンケル的なエスノメソドロジーを研究し、アルフレッド・シュッツ (Alfred Schutz) の弁

証哲学を読んでいます。そして自分たちそれぞれのテーマにそって、実証的な研究をすすめているわけです。こうした、主として合衆国を中心に展開をみたいいくつかの新たな社会理論の潮流は、カナダ社会学のなかにも入ってきました。カナダ社会学の側では、今までのものの考え方でできなかった問題を、研究対象としてとりあげる。そして、このような二つの違った社会学の方法、社会理論が、機能主義社会学の衰退のきざしをみた1965年あたりから、広まっていったわけであります。

そのようにして、変動をくり返し、その結果、社会学者たちは、学説をもう一度調整し、修正と再構築をはかろうとつとめてきたわけです。1975年前後には、ベトナムの問題も解消し、学生運動もまったく下火になるといった政治状態をむかえました。そこでは、非常に多くの社会学理論が、現在肩を並べて存在している。これが今の現状ではないかと存じます。ただ、多くの社会学的研究において結局、機能主義的方法を用いた分析を試みても、自身を機能主義社会学者として自覚するということは、あまりありません。反対に、そうした機能主義社会学者であるというレッテルを、最近では、はられることさえも、極度に嫌がるという傾向がございます。

先に申しましたように、新マルクス主義社会学派には、内部分裂がございます。他方、アメリカ社会学において伝統的な社会学説といわれているものに、社会心理学的研究、ことに「シンボリックな相互作用主義」 (Symbolic Interactionism) という方法も見逃せません。これは、ゴフマンによって、1975年あたりから新しい方向をみせるようになってまいりました。

私は、ゴフマンに、非常に大きな理論的スケールがあることを、最近知ようになりました。ゴフマンが、シンボリック・インタラクショニズムをつうじ、理論的な構成を、構造主義によってやりとげようではないかという、期待までございました。たとえば、1957・8年度にゴフマンが、『日常生活における自己の提示』 (Presentation of Self in Everyday Life) を発表したのは、今はどなたもご存じのことと思います。そうしたもののうちに、シェクスピア的な劇のひとつひとつのアプローチから、社会関係を考察していたことを思

い出してください。そこでは、人間の行為が、単に他の人と相關関係を結ぶというよりもむしろ、自分を、できるだけ他の人の目からみて優位なものと、一つの「印象づけ」をやろうとみたことです。

社会関係は、多くのばあい、単に行動者の「印象づけ」の作為しか行なわないのではないか。だれでも、舞台の上にあがって聴衆を前にし、その配役に応じて役割を演じている。そうした皮肉な考え方を、ゴフマンは最初もっていたわけです。しかし、1975年になりますと、そうした考え方を、次第に構造主義的なものに置きかえようとしていました。ここでは、プレイングの分析は、人間関係を、一つのきまった既存のプレイングのなかで、分析しようとしています。そうした、フレーム・ワーク (framework) におけるゴフマンの理論的な見解は、今までのゴフマンによる社会心理学とは、かなり違った視角がでてきたわけです。そのゴフマンも昨年亡くなりまして、大きな理論的な行程というものが、むなしく終わってしまいました。その後1970年代には、とくに新しい理論は提起されなかったようです。弁証法的・哲学的なバックグラウンドをもち、いろいろの理論構成をする試みは、あまり顕著ではなかったといえるでしょう。

最近の理論的傾向としては、まず生物学者が、社会問題に興味をもちだしてきたといえます。例えば、1972年にハーヴァード大学のエドワード・ウィルソン (Edward Wilson) が、ソシオバイオロジー (Sociobiology) 「社会生物学」、あるいは「生物学的社会学」とでも申しますか、新しい生物学的進化論を提起しております。

これまでの私たちの考え方からしますと、人間社会は、動物社会とはまったく区別されるものであると、してきました。ことに、そこに特別の文化形態をもち、言語によって新しい、また古い文化を、一世代から他の世代へと移行していく。あるいは継承していく。だから、人間社会は、動物社会とまったく違ったものであると、考えられてきたわけです。動物的・生物学的な進化と、人間のつくった文化の進化とは、まったく別のものであるとしてまいりました。ただ、ここでは、生学的に進化した動物が、ある点において、文化的にも進化を進めえる条件というものを、擲もうとし

ているわけです。

今迄の進化論者の考えからすれば、最上に適したものが生存し得るのであるという考察から発しているのですが、ウィルソンは、そうした自己中心的な考えを広めていこうとはしませんでした。即ち、従来迄の考えによれば、他は他であり、自己は別の判然たる主体である。自己の今日ある処は、先天的に得た優秀性に依るところであって、他の人の今あるのは、劣等性に帰することができる。しかし、ウィルソンの考察する処では、下等動物よりの進化の過程には、個人中心的行為だけでなく、多くの愛他精神による行為 (altruism) が、優秀性を保護し、それを次の時代でよりよく蓄積していく作用をなしていると云うのである。この愛他行為を見逃して、進化過程は理解し得ないし、社会程度が高まってゆくに従い、「協調協力」行為へと移行していくのである。ウィルソンの見る処では、「葛藤」が進化過程の性格でなく、「犠牲」が進化を可能にしていたのである。多くの鳥は、他の同種の鳥を後世に育成させる為に、犠牲となり、自分の身を捧げていったのである。

ソシオバイオロジーは、人間の行動を生物学的な視点から眺めようとする理由から、いいかえれば、人間の社会行為を生物学的要素に帰納しようとするので、どうしても、原因、結果の要因と要因との距離が拡まってしまふのである。遠距離を持った因果関係は説明として、あまり意義があるとも考えられないし、又、ある点では、ヘリクツともなりかねないのである。それとは別に、ソシオバイオロジーの批判される第一の理由は、その根本的な理論体系の中に、人間の「智」と「意識」は、「主」の立場でなく、「従」の形でしか取り扱われないという処にあるのではないだろうか。

そういうところから考えてみますと、機能主義はまだ一部残っている。新マルクス主義もまだある。伝統的な社会心理学もある。第二のパーソンズ理論というものが、これから将来期待でき得るかという質問に対しては、かなり懸念が、我々の胸におこらざるを得ません。

これからの社会学説が、如何にして理論形成が行われ、如何なる方法によって、一つの科学性・普遍性をもった社会学理論が、つくられていくのでありましようか。現在、社会学分野には、現象

学的な理論化もあるし、また新しく、生物学的なソシオバイオロジーといわれる学派が出てくる。こうした群雄割拠的な理論のあり方を、どのようにして解釈すべきであるか。これは非常に大きな問題であります。

社会と申しますのは、非常に大きな面をもって。大きな多元的な面というもの、一つの理論でもって説明しえるかどうか。マクロのものあれば、ミクロのものもあるし、構造的なものあれば、行動的なものもある。文化的なものあれば、心理的なものもある。そうしたいろいろな面、いろいろな現象をもった社会の問題、いわゆる社会学の対象というものを理論にまとめるということは、私は非常に困難な話であり、全包括的な理論をつくること、それ自体に私は大きな疑問を感じるわけです。

まず第一番目の、その理論的な態度というものが、できるだけ比較社会的な立場をとって、一つ一つの社会の歴史性を考えることによって、一つの限定された理論というものをつくっていく。それから、マクロ的なものと、ミクロ的なものをできるだけ分け、その間の関係というものを、正しく把握していく。文化的なもの、観念的なものを、また不合理なもの、合理的なもの、と関連を考えていくし、勿論そうしたことがらは、パーソンズ自身が、1937年以来、やったわけなんです。

現在の状態というものは、1937年前のものに戻っているのではないかと、そうすれば、誰がどういうふうにして、パーソンズのやったやり方でなく、新しい社会的な構成を望めるでしょうか。

私の結論としていえるのは、そうした理論構成が現状では、確かに非常に困難であるのは確かだということです。これは社会理論、あるいは学説の一時期の停頓状態にあたるのではないのでしょうか。ということは、おそらく誰にも、どうしようもないことだと思います。

それからまた、私自身が感じられることはつぎ

の点です。それは北米社会学者、またはヨーロッパ社会学者たちが、今までの社会的な理論の設定のための努力を続けてまいりました。しかし、それがあまりにも昂じて、疲れはてた状態なのではないでしょうか。仮りに、そうした分析が正しいとすれば、現在のような群雄割拠の状態は北米または欧州の社会理論体系の危機を生み出しています。そうだとすれば、これからの理論的展開は、ヨーロッパ人でもない、また北米人でない社会学者の役割も、みなおしてみるべきではないでしょうか。つまり、別の文化的体系のなかで、新しい社会理論を考え、また、それを体系的にしていくなかで、その可能性が、私は充分にあると考えます。

こうしたことがなされなければならないとすると、日本の、社会学者たちのこれからの役割は、非常に大きくなるでしょう。それは、今までやってきたような西欧社会学の翻訳的紹介だけではなく、この紹介から得た知識を基盤にし、違った文化的なセンスや知識を背景にして、新しい社会理論や学説を設定してもよいのではないのでしょうか。つくり得る可能性は、現在、十二分にあるのではないかと、私はこう思う次第です。現在、私がトロント大学において、社会学史などをいろいろ講義します場合に、結論はとにかく私としては、新しい理論の構築は困難だと提唱しております。私がこうして今日お話ししております間に、考えられることは、今後の社会理論は、日本の社会学者たちの手で、新しい文化的要素をふくみつつやってほしいし、また、やらなければならない役割を課せられているということです。

語り残した部分が多くあると思いますが、これをもって、限られた時間での、私の講演を終らせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

〔本稿は、昭和58年5月10日行われた社会学部春季学術講演会の講演内容を文章化したものです〕